

# 「かつて赤城山麓に大地震が発生した」

平成 26 年 4 月 18 日（金）於：城南公民館 ホール

内 田 憲 治

## 1 新里村で地震遺跡を発見・調査

### ◇ 昭和 55 年－山上の天笠南遺跡で地割れ

地割れは縄文時代前期の竪穴住居、8 世紀中葉の大型土坑、平安時代の掘立柱建物を貫いていた。地割れは、地震によって発生したものと考えられるが、8 世紀中葉以降の可能性を示しつつも、その発生年代を特定し得る証左は見受けられなかった。



### ◇ 昭和 57 年－分布調査で山崩れ堆積を発見

埋蔵文化財詳細分布調査は、地表を歩き土器などの分布状態や地形を観察し、遺跡の年代別の分布図を作成するものである。

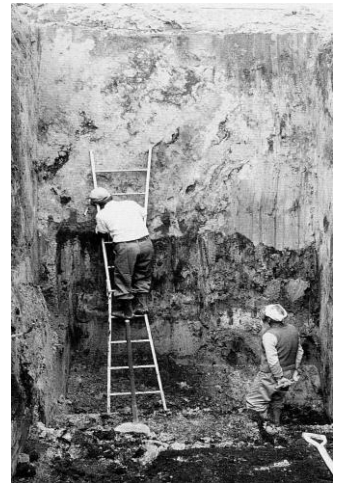
大久保地内の切り通しで、山崩れ堆積を発見した。中央の黒色土帯の上の土層は、二次堆積のローム層であった。従って、中央の黒色土の上面が山崩れ発生時の地表面である。



### ◇ 昭和 59 年－大久保原遺跡の水田上に浅間 B テフラが堆積

大久保原遺跡の埋没、放置された水田耕作土の下層は、山崩れ堆積層で、その厚さは数 10 ㍍以上に及ぶものと考えられる。その上面に浅間 B テフラ（1108）が堆積していた。そのことは山崩れが天仁元年（1108）以前であることを証明している。

大久保地区は、その地名のとおり大きく窪んだ地形であり、現在の地形は山崩れ堆積によって形成されている。天仁元年（1108）に浅間火山が爆発し、降下した浅間 B テフラにより上野国の田畠はことごとく埋没し、水田は復旧されることなくそのまま放置されていた。



### ◇ 昭和 60 年－武井・小沢遺跡の住居に地割れ

小沢遺跡は南へ傾斜する地形に立地し、奈良時代の竪穴住居を数本の地割れが斜めに切っており、その部分の床面は約 40 ㍍陥没していた。それは住居が廃棄された後に、地割れが発生したことを示していた。地割れは谷に向かって並行するように検出された。

出土遺物の甕や坏などから、住居は8 世紀の第 2 四半期に比定され、地割れはその時期以降に発生したことを示している。

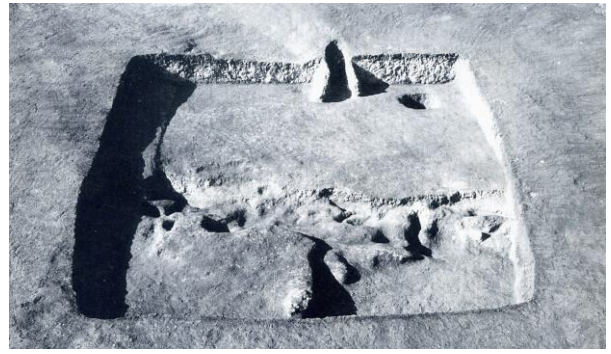




#### ◇ 昭和62年―武井・蛭川遺跡の住居に地割れ

古墳時代後期末の竪穴住居中央から、半部が地割れにより、床面は約40センチ陥没していた。この状況は住居が廃棄された後に地割れが発生したことを示している。

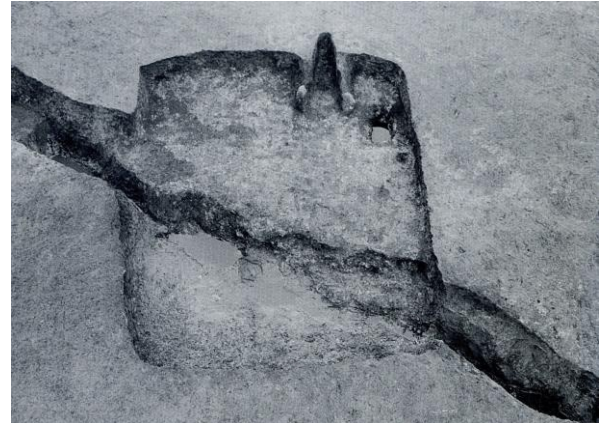
出土遺物の甕や坏などから、住居は7世紀第4四半期に比定され、地割れはその時期以降に発生したことになる。



#### ◇ 昭和63年―小林・日横遺跡の住居に地割れ

本遺跡からは5条の地割れが検出され、いずれも竪穴住居を断ち割る状態であった。地割れの上幅は約1メートルで床面の陥没による段差は約30センチを測る。

出土遺物により、本住居は7世紀後半に比定されるので、住居が廃棄された後に地割れが発生したことが考えられる。その理由は床面が陥没し段差があることである。



#### ◇ 新里村内で検出された山崩れと陥没断層と地割れ



奥沢の大日遺跡の二次堆積ローム層。山崩れ発生時の地表は水平の黒色土。



奥沢の大日遺跡で発見された陥没断層。



新川の広間地遺跡内の地割れ。



## 2 荒砥地区で発見された災害遺跡

### ◇ 昭和57年—荒口町の荒砥前田遺跡で氾濫土層の下に水田を検出

発掘された水田は、6世紀中葉頃に開田され荒砥川の氾濫によって埋没していた。氾濫土はほとんどローム層を主体とするもので、上流域の大規模な山崩れ発生が考えられた。水田耕作土の上面より出土した土器は、9世紀前半に比定されることから、荒砥川の氾濫の時期も、その範疇に入るものと考えられる。



### ◇ 昭和59年—荒子町の柳久保遺跡で住居を分断した地割れ

新旧2軒の竪穴住居が重なる部分を地割れが分断している。2軒の住居は8世紀中葉と7世紀後半のもので、床面も歪んだ状態で部分的に陥没が見られた。

数状の地割れの上部には、天仁元年の浅間Bテフラ（1108）で埋没した水田が検出された。これにより地割れの発生は、8世紀中葉以降から12世紀以前と考えられている。



### ◇ 昭和63年—西大室町の内堀遺跡で地割れ検出

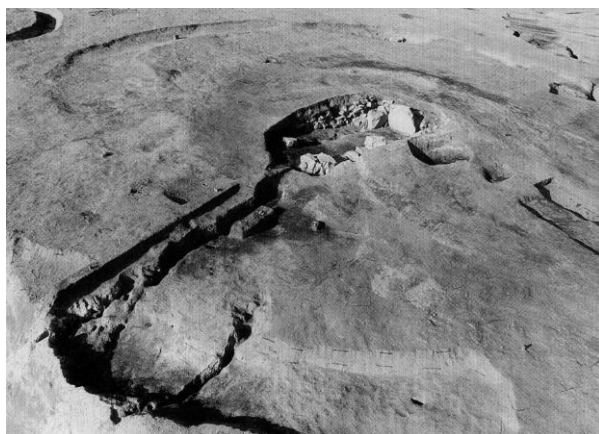
大室古墳公園内の北部で、全長53mにわたり地割れが検出され約53cmほど陥没し、6世紀後半の古墳の一部を破壊していた。地割れは住居と切りあい、その埋没過程の土層上位から9世紀中葉の須恵器が出土し、その上層に天仁元年（1108）の浅間Bテフラが堆積していた。それにより地割れ発生時期は、9世紀前半代から天仁元年（1108）の間であることが考えられている。



### ◇ 平成元年—下大屋町の阿久山遺跡の古墳を地割れが破壊

阿久山遺跡は、産泰神社の南へ約500m付近に立地する。地割れによる陥没の溝は古墳の石室を縦断し、石室東側の壁の石は陥没溝内に落ち込んでいた。古墳は7世紀前半頃の築造と考えられる。地割れの埋没土の上位には天仁元年（1108）の浅間Bテフラが堆積していた。

上記の内容により、地割れ発生時期は7世紀前半以降で天仁元年（1108）以前である。

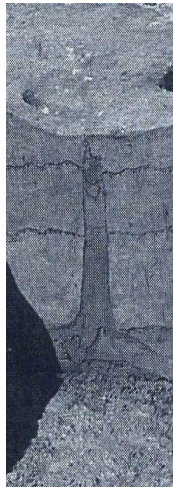




#### ◇ 平成2年－今井町の今井白山遺跡で噴砂を検出

国道50号線の拡幅工事に伴い行われた発掘調査によって、古墳時代後期の床面が地割れによって陥没していた。そして床面下の土層の断面調査で住居床面に向かって吹きあげている噴砂が確認された。

古墳時代後期の住居は床面が陥没していたが、平安時代前期の住居は影響を受けていないので、陥没は地震によるもので、その時期は7世紀から9世紀第3四半期とされた。



### 3 笠懸、粕川、大胡、大間々、宮城など赤城南麓で続々と地割れを検出



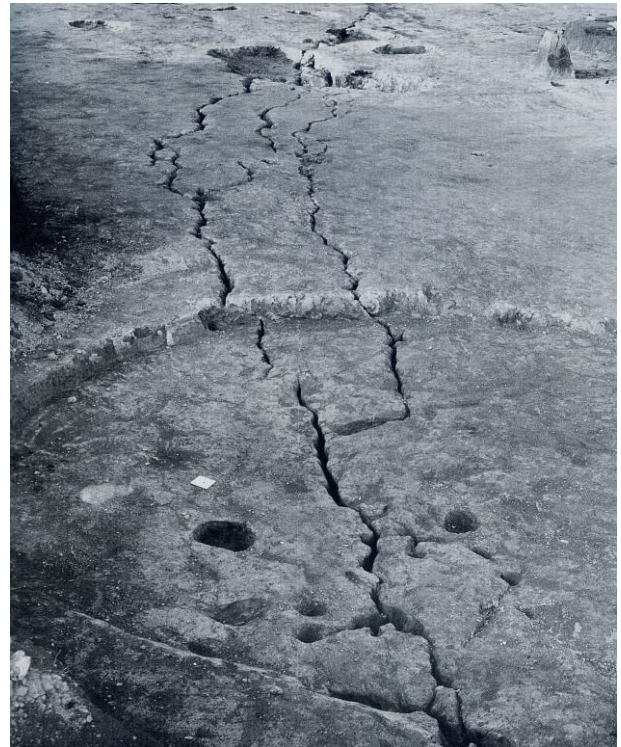
平成元年－笠懸町の清水西丘遺跡の大規模な地割れ。



昭和58年－大胡町の上大屋・樋越遺跡群で検出された地割れ。



昭和61年－大間々町の瀬戸ヶ原遺跡の地割れは階段状に陥没した。



平成元年－宮城村の市之関前田遺跡の縄文時代中期の竪穴住居を破壊した地割れ。



昭和60年－粕川村の女淵吹上遺跡で検出された住居群を破壊した地割れ。



#### 4 新里村の砂田遺跡と蕨沢遺跡の調査で地割れの年代を解明

##### ◇ 平成元年－新里村の砂田遺跡



用水路はローム塊の泥流で埋まっていた



△用水路の発掘調査風景

▽用水路の底面から出土した土器

用水路の取水先は鍋木川に求め、砂田遺跡内の奈良・平安時代の集落を迂回し谷水田へ向かっていた。谷水田の水不足を補うため鍋木川から引水したが、それが後に泥流に襲われる要因となった。

用水路の泥流を取り除き発掘を進めていくと、その底面に密着した状態で多量の土器が検出された。その土器は9世紀初頭のもので泥流によって直接埋没していた。そのことは泥流の発生から間もなく埋没したことを示すとともに、泥流発生が9世紀初頭であることを物語っていた。



##### ◇ 平成元年－新里村の蕨沢遺跡



水田土層の断面

蕨沢遺跡は、蕨沢川に抱かれるように立地している。赤城山麓で発生した山崩れは、谷を堰き止め、泥流となって下流域を一気に襲った。

蕨沢遺跡の平安時代の水田は30㌔から50㌔の厚さの泥流で埋没していた。

左の写真は蕨沢遺跡の水田土層の断面である。上から少し下の白く見える層が水田を埋没した泥流で、その下の黒色土は平安時代の水田土層である。水田には地震による亀裂ができ、その中に泥流が入りこみ、下からは噴砂が吹きあげていた。亀裂の中に泥流が直接入り込んでいるということは、地震と泥流発生が極めて短時間のうちに起きた現象であることが証明された。



蕨沢遺跡の水田跡



## 5 『類聚国史』に記された地震の記述

『類聚国史』より抜粋「災異五地震 弘仁の項」  
 「九年七月。相模。武蔵。下総。常陸。上野。下野等国地震。山崩或埋数里。压死百姓不可勝計。  
 八月庚午。遣使諸国。巡省地震。其損害甚者加賑恤。(中略)  
 如聞。上野国等境。地震為災。水潦相仍。人物凋損。(中略)  
 免今年租調。并不論民夷。以正税賑恤。助修屋宇。使免飢露。压没之徒速為斂葬。(以下略)」

書き下し  
 『類聚国史』より抜粋「災異五地震 弘仁(八八)の項」  
 「九年七月。相模。武蔵。下総。常陸。上野。下野等の国地震ス。山ハ崩レ或ハ埋ルコト数里。压死スル百姓勝ニ計ル不可。  
 八月庚午(十九日)。諸国ニ使イヲ遣ワシ地震ヲ巡省セシム。其ノ損害甚シキ者賑恤ヲ加ウ。(中略)  
 聞クガ如クンバ。上野国等ノ境。地震イ災ヲ為ス。水潦相仍リ。人物凋損ス。(中略)  
 今年ノ租調ヲ免ジ。并テ民夷ヲ論ゼズ。正税ヲ以て賑恤シ。屋宇ヲ助修シ。飢露ヲ免ガラシム。压没ノ徒ハ速ヤカニ斂葬セヨ。(以下略)」

### 訳文

「弘仁9年(818)7月に相模(神奈川県)、武蔵(埼玉県)、下総(千葉県北部)、常陸(茨城県)、上野(群馬県)、下野(栃木県)等の国に地震が発生した。山は崩れ、それにより多くの村々が埋まり、土砂にのまれ压死した人の数は計り知れないほどの被害を蒙った。

8月庚午(19日)、使いを諸国に派遣し、地震災害の被害状況を調べさせた。その損害が甚だしい場合は罹災者を救うための物品を加えた。(中略)」

「聞くところによれば、上野国等の境が地震による災害が最も多く、河川の決壊による泥流が何度も押し寄せ、多くの人が亡くなり物も多く失われた。(中略)」

「災害が著しい場合は、国司(現・知事)と相談し今年の税は免じて、併せて公民とそれ以外の者との区別なく、税として集めてある米などを罹災者に施し、住まいを修繕し、食事を施し、土砂で埋まって亡くなった人は速やかに手厚く埋葬しなさい。(以下略)」

## 6 地割れから古代の地震解明までの経緯

昭和55年新里村の天笠南遺跡から地割れが検出され、その後新里村内で10ヶ所の遺跡で地割れの調査を行った。また、荒砥地区では6遺跡、宮城村・大胡町・粕川村・笠懸町など10遺跡内で地割れの調査が行われていた。しかし、地割れ発生の年代を特定するには至らなかった。平成元年に新里村内の砂田遺跡で、泥流発生が9世紀初頭であることが判明した。また、蕨沢遺跡の調査で赤城山麓の山体崩壊は地震によって引き起こされたことが判明した。その結果、泥流が発生し下流域を埋没するまでに時間差が無かったことも証明された。そして『類聚国史』に記載されている大地震の具体的な内容が、発掘調査によって明らかになった。天笠南遺跡で出会った小さな地割れから、足掛け10年の歳月を経て古代の歴史地震が解明できたことは灌漑深いものであった。

—— 国内初！鎧を装着した人骨発見 ——

## 「金井東裏遺跡は語る」

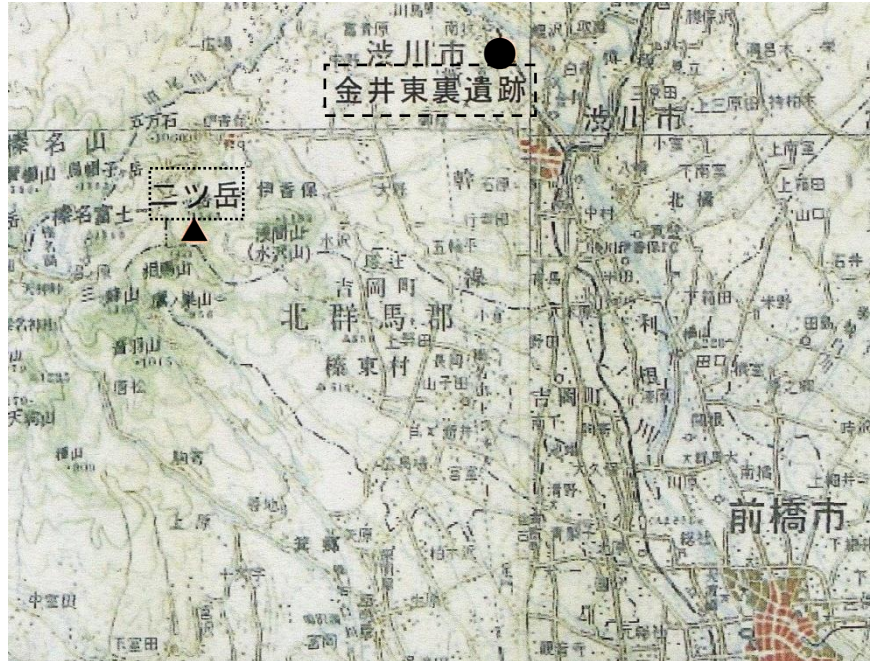
平成 28 年 3 月 12 日（土）

於：城南公民館

内 田 憲 治

### 1 六世紀初頭の鎧装着の人骨出土（写真は「上毛新聞」より転載）

平成 24 年 11 月 10 日、県埋蔵文化財調査事業団は渋川市の金井東裏遺跡から火山灰層に埋もれた「鉄製のよろい鎧」を装着した人骨が発見された」と発表した。同遺跡は国道 353 号金井バイパス（上信自動車道）の建設に伴い、9 月から埋蔵文化財の発掘調査が行われていた。その調査現場から六世紀初頭の榛名山・二ツ岳の爆発



榛名山の二ツ岳と金井東裏遺跡の位置図

による火山灰層に埋没した遺跡が発見された。調査は表土やその下層の黒褐色度を剥いでゆくと、その下層から火山灰層が現れた。火山灰層は約 30 ㌢ほど堆積しており、それを少しづつ掘り下げていた時、移植小手にカチッと固く感じる物があり焦げ茶色の固形物が現れた。

「鉄の塊が出た！」という興奮した作業員の声に、調査員は急いで出土地点へ駆け付け、緊張しつつ慎重に調査を進めて行った。鉄の塊は次第に大きく広がり、それは鉄製のよろい鎧であることが分かってきた。

鎧は小さな札状の鉄板に小穴をあけ、それを紐で編んで作ったもので、「小札鎧」というものであった。鉄製の鎧の下には人骨が発見



鎧を装着した人骨などの出土状態



され、その状態は右膝を立て、うつ伏せの状態の後頭部の一部は欠けていた。右太ももの付け根部分は火砕流層に飲み込まれ欠損しているが、骨格や骨の太さから成人男性と推定された。この<sup>よろい</sup>鎧人骨の近くから、生後一年に満たない乳児の<sup>よろい</sup>頭骨と<sup>てつぞく</sup>鎧の胴部と鉄鎌10数本が見つかるている。その後、ここから5<sup>メートル</sup>程離れたところからも脚の骨とみられる出土もあり、さらに新たな幼児の骨も発見された。また、<sup>よろい</sup>鎧を着た古墳人から16<sup>メートル</sup>西側に、頭を東側に向け、うつ伏せの状態で見出された成人女性の骨が発見された。その女性の右足は大きく開いて膝を曲げ、足先は強く外に向けていた。左足は伸びているが足先は内側に入り、かなり無理な姿勢が見受けていた。この状態から女性は榛名火山方向を向いている時に火砕流に襲われ、それを避けるために左足をよじりながら左側に倒れ込んだ、と推定された。

女性の身長は143<sup>センチ</sup>前後で、首から<sup>くだたま</sup>管玉、頭の付近からガラス小玉が出土し、それは首飾りや髪飾りであった可能性が考えられた。腰の辺りから複数の<sup>うすだま</sup>臼玉が出土し、それを入れた袋を腰に提げていたようである。こうした装飾品から社会的に上層階級の女性であることが推察された。火山灰層は酸性度が極めて強く、1,500年余り前の古墳時代の骨は通常残存することは少ない。この遺跡で人骨が良好な状態で発見されたのは稀なことで、その理由は砂の粒が細かいため保水性が保たれ奇跡的に残ったのである。

## 2 発掘調査で判明したこと

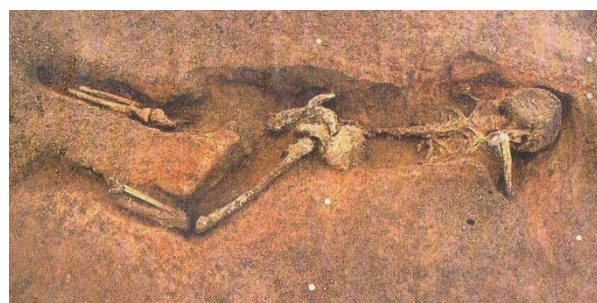
<sup>よろい</sup>鎧を着た人物が装着していた小札<sup>こざね</sup>鎧は当時最新の武具であることが判明した。しかもこの古墳人は、<sup>よこはぎいたいたびょうどめしょうかくつきかぶと</sup>横矧板鋌留衝角付冑を手にし、腰には<sup>ろっかくせい</sup>鹿角製の柄を付けた<sup>とうす</sup>刀子と<sup>きげと</sup>提碁を所持していた。このような持物からこの人物はこの地域の首長クラスの人物像が想定されている。<sup>こざね</sup>小札



首長と見られる鎧装着人骨



鎧の復元図と出土部分



首飾りを付けた女性人骨



鎧の内側から発見された繊維



よろい 鎧の内面からは鉄さびの中に繊維の痕跡が認められ、この古墳人が着ていた衣服であることが判明した。その後、よろい 鎧を着た人骨は調査現場から搬出し、現場では確認できなかった両手足や両肩や骨盤なども明らかになった。なお、この古墳人の身長は163センチが測定された。よろい 鎧を装着して火砕流に飲み込まれて倒れていた男性の人骨の近くからは、生後一年に満たない乳児の頭骨と別の胸部のよろい 鎧と鉄鏃（鉄製のやじり）10数本が見つかった。この出土状況から首長と見られる男性がよろい 鎧の胸部に乳児を包み保護していたのではないかと、その乳児は自分の後継者たる息子だったのでは、との説も議論された。

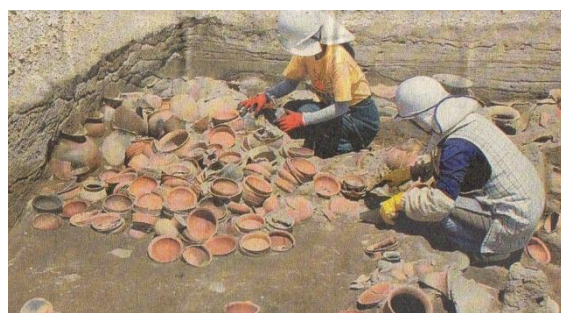
よろい 鎧を着た男性は榛名山の方を向き、四つん這いでうつ伏せの姿勢で発見された。この男性は榛名山・二ツ岳の榛名山の二ツ岳と榛名富士と浅間山爆発当時に鎧を装着し、何故山の方を向いて倒れていたのか疑問は深まるが、このことについて二つの考察がある。一つは、山の怒りがなかなか鎮まらない。集落の責任者たる首長はよろい 鎧を装着し噴火を鎮めるため、山の方を仰ぎながら数日祈願の儀式を行っていた。その際、火砕流に巻き込まれたとする説。一方、もう一つの説は、山の怒りがなかなか治まらず危険を察知した首長はよろい 鎧を装着し、近隣の集落の人達に避難するよう呼びかけている際に火砕流に巻き込まれてしまった、とする説である。なお、当時としては貴重な装飾品を身に付けた上層階級と考えられる首飾りの女性と、鎧を装着した首長と見られる男性はどのような関係があったのであろうか。

その後、現場の調査でおびた数多くの土器が積み上げられた祭祀遺構が発見された。

祭祀遺構は、直径5.5メートルの円形に囲まれた中に、壺や甕などの大型土器がコの字形に配置され、その一角には壊が20個も重ねられていた。須恵器の大甕の側から、うすだま 白玉1万点、ガラス玉200点、勾玉と管玉70点、鉄器100点、剣や鏡、短甲の石製模造品150点、青銅鏡1面など貴重な品



榛名山の二ツ岳と榛名富士と浅間山



祭祀遺構から出土した大量の遺物



1号古墳の墳頂部から検出された二つの埋葬施

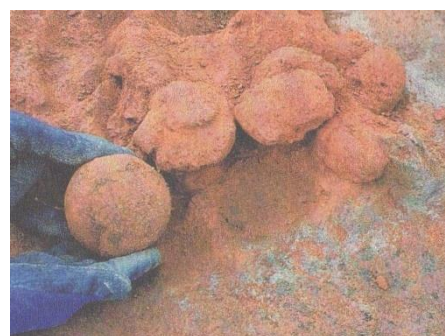


が出土した。なお、直径 15 ㍎の円形 1 号古墳も発見され、二つの埋葬施設が並列していた。その大きい施設からは、鉄剣・素環頭大刀・鉄鏃が副葬されていた。一方、やや小規模な施設からは、ガラスの勾玉と小玉が出土している。同じ古墳に竪穴式の二つの埋葬施設があり、その副葬品の内容から男女の被葬者は婚姻関係であったことが想定される。1 号古墳の北側からは直径 8 ㍎の 2 号円形古墳が検出された。埋葬施設からは鉄斧・刀子・提碁、墳丘部からは 鉋・刀子など鉄製工具が出土している。この古墳の被葬者は豊富な鉄製品を持っていることから鉄器の生産に関与していた可能性が考えられている。

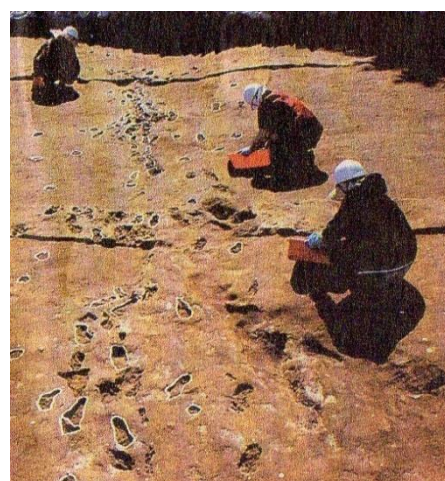


剣菱形杏葉

竪穴住居からは、剣菱形 杏葉が出土したがこれは古墳時代の馬の尻部を飾るもので鉄の地板に金メッキを施した銅板をかぶせ 鋳で留めてある。このような 杏葉を所持できた者は相当な有力豪族の存在を物語るものである。なお、火砕流堆積物の中から 100 点を超える赤玉が出土した。直径 7 ㍎、重さ 400 ㍉ほどで赤色の土を団子状にしたものである。周囲から柱穴が 6 本確認されたことから赤玉はこの小屋の施設に集積されていたことが考えられる。この時代に「赤」は神聖な色で、古墳の石室内面や埴輪が赤く塗られる例が多いが、古代の人達にとって赤色は特別な色で靈力を有し悪霊などを寄せ付けないという思想によるものである。さらに火山灰層の調査で古墳人の足跡が多数検出された。大きさは 10 ㍎から 25 ㍎でほとんどが裸足で、榛名山を背にして東に向かっている様子がわかる。なお、馬の蹄跡もあり馬を連れ避難していた様子が想像される。金井東裏遺跡は、火山の爆発により火山灰層に真空パックされた状態となり、鎧を装着した男性や様々な遺物が発見された。そのため六世紀初頭の古墳時代の様子をそのまま見せてくれたことになり、今後これらの資料を精査することで当時の社会をより明らかにすることが期待される。



数多く発見された赤玉



火山に背を向け東へ逃げる足跡群

### 3 六世紀に榛名山は二度大爆発した

六世紀初頭に榛名山は大爆発し大量の火山灰（H r - F A）を降らせた。その範囲は北の月夜野から奥利根方面、南は高崎から熊谷方面に至り群馬県のほぼ東半部を覆う状態であった。田畠は火山灰層に厚く覆われ、特に水田面はこの降下した火山灰層により上毛野

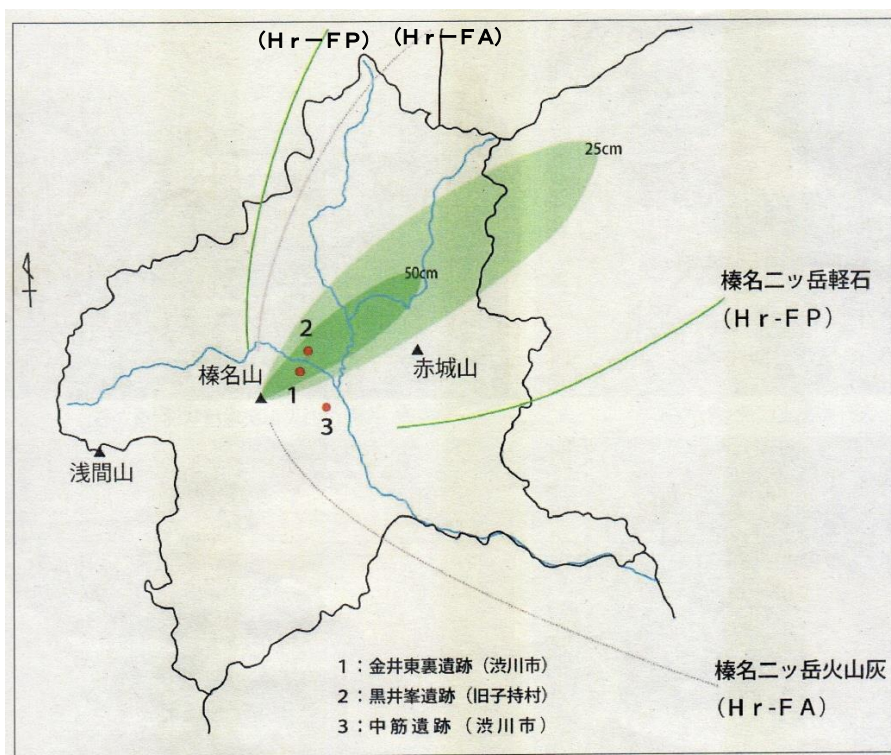


国内の東半部の水田は復旧困難となり放棄せざるを得なくなった。なお、この爆発により火砕流が発生し、瞬く間に山麓を流れ下り金井東裏地区を襲った。榛名山・二ツ岳から金井東裏遺跡までの距離は約 8.5 ㎞である。火砕流の速度は、数 10 ㎞から山麓が急傾斜の場合は百数㎞になる。恐らく息つく間もない程の速度で金井東裏地区を襲ってきたのであろう。なお、火砕流の温度は数百度に達するといい、灼熱の爆風を伴うもので多くの人命が失われ被害は相当甚大であったことが窺われる。



金井東裏遺跡を襲った噴火被害図

榛名山二ツ岳は六世紀初頭に火山灰（Hr-F A）を主体とする大爆発をしたが、それからおよそ 50 年後の六世紀中葉に大爆発している。その爆発は主に北東方向に多量の軽石（Hr-F P）を降下した災害であった。六世紀に二度大爆発した榛名山の噴出物の降下範囲図の「2: 黒井峯遺跡（旧子持村）」の調査で約 1.5



六世紀に二度大爆発した榛名山の噴出物の降下範囲図

㎞の軽石層が堆積していたことが確認されている。この時の爆発で堆積した軽石が、後に軽量ブロックの原材料として使われている。因みに今から約 3.2 万年に爆発した赤城山からの噴出物は栃木県で鹿沼土として園芸用に使われている。また、約 4 万年前に爆発した榛名山の噴出物は旧北橋村八崎で検出され園芸用の桐生砂として使われている。

平成 3 年 6 月 3 日、長崎県の雲仙・普賢岳の噴火で発生した火砕流により 43 人が犠牲になる事故が発生した。最近では平成 26 年 9 月 27 日、紅葉のなか長野県から岐阜県にまたがる御嶽山に登山をしていた人達が、噴火による火山岩や火山灰などにより 63 人が犠牲になっている。火山の噴火は火山岩や火砕流や火山性有毒ガスなどによる大災害が発生し、金井東裏遺跡は 1,500 年を経た現代へのメッセージとも受け取れるのである。



## ◎ 追証：出土した人骨の精査で判明したこと（令和2年8月記）

### （1）鎧を着た長と首飾りの古墳人

男性は40代で身長は164センチ、小札鎧<sup>こざねよろい</sup>を身に付け、腰には鹿角製の柄を付けた刀子と提碁<sup>とうす きげと</sup>（携帯用の碁石）を所持していた。小札鎧<sup>こざねよろい</sup>は当時最新の武具であり、それを装着していたこの人物は、この周辺に存在していたムラの首長であることが考察された。なお、頭骨の特徴から朝鮮系の人物であることが認められ、その二世か三世ではないかと検証された。



頭骨より復元された男女の顔（「世界ふしぎ発見！」TBS-TVより）

女性は30代で身長は143センチ、管玉やガラスの首飾りを付けていた。このことから相当身分の高いことを物語っている。頭骨の特徴は在地の日本人の特徴を有しており、やや角顔で顎が張る顔立ちであった。両者は夫婦で乳幼児は二人の子であろうと見られている。

男女の歯の検証により二人は長野県南部の伊那谷で生まれ育っていたことが判明した。地下水にはストロンチウムという金属元素が含まれており、歯を検証することによって生まれ在所が明らかになるという。そして、伊那谷は在来の木曾馬の一大産地である。

### （2）長野県伊那谷で生まれ育った二人が何故上毛野国へ

朝鮮に渡った倭人<sup>わじん</sup>（日本人）は馬という動物を見て仰天した。馬の速度や重い荷を運び、しかも戦いにも有効で万能な動物であることを認識した。日本へは六世紀頃には朝鮮半島から導入されたと考えられている。上毛野国は関東以北の奥州を統治するうえで大和王権の重要地域でありその拠点となっていた。それに対応するため上毛野国は馬の増産が不可欠となり、伊那谷からその技術を持つ男性とその妻を迎えたのであろう。その重要拠点を象徴するかのように多くの前方後円墳が存在している。前方後円墳は大和王権の許可なく築造されることはなく、密接な関係を持った人物の存在が窺える。奈良時代には馬の生産はさらに盛んになり発展を遂げ、馬が群れるところとなり「群馬」になる。

### （3）鎧を着た男性はなぜ榛名山に向いて倒れていたのか

鎧を着た男性は頭を榛名山に向け、うつ伏せで四つん這いの状態で火砕流に埋もれていた。女性の頭部は山に向いていたが火砕流により体がよじれた状態であった。周辺には火山の爆発から逃れるため山に背を向けて逃げ去るムラ人の足跡が多数発見されている。なぜ王夫婦一家は逃げなかったのか。遺跡からは祭祀の跡が発見されており、山の神の怒りが治まるよう祈り祈願していた。しかし、山の神は治まることなく益々噴煙を上げやがて大規模な火砕流が発生した。崇り神<sup>たたり</sup>（この場合は噴火）が治まらない時は、王は鎧を付け鉾<sup>ほこ</sup>を持ち神に立ち向かい怒りを鎮め治める責務があった。王は崇り神<sup>たたり</sup>に決して怯む<sup>ひる</sup>ことなくムラ人を護るため勇敢に命が尽きるまで責任を全うしたのである。